

北米東部補習校生徒の現状 —プリンストン日本語学校の実践報告—

カルダー淑子
Princeton Community Japanese Language School
calders81@aol.com
国際基督教大学公開セミナー
March 28, 2009

発表内容

- 補習校とは
- 生徒の多様化
言語運用力
アイデンティティー
- 対応するカリキュラムの枠組
- プリンストン日本語学校の実践から

米国補習校の学習者

- 補習校とは:
駐在員子女の帰国時の適応が目的
週末の国語補習教育(週の5日は現地校)
文科省の補助を受ける(派遣教員・講師・校舎援助)
文科省教科書による国内準拠の教育
- 北米に在留する日本人小中学生:約2万人(文科省 2007)
77補習校の在籍者:約12,500人(60%以上)
- 補習校における永住型学習者は増加傾向
戦後に渡米した永住親世代が増加(新一世・二世)
永住者の日本語教育機関が限られている
補習校の50-70%が永住予定者の子供(北米東部)
- 最近では経済の悪化を反映して帰国生が増加

補習校における学習者の現状

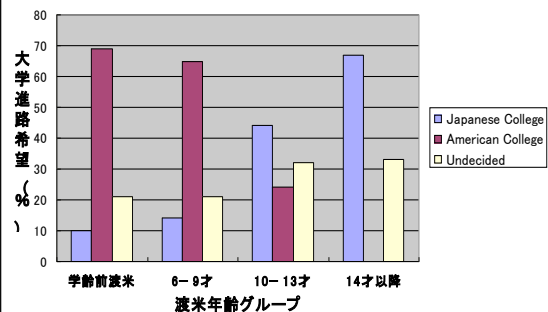
- 言語背景の多様化が進む
英語優位のバイリンガルへの全体的な移行
片親が非母語話者の生徒の急増
複数言語の使用が増える(中・韓・独・仏)
- 四技能のアンバランス(読み・書き能力の不足)
- 文型・助詞・敬語の遅れ
- 言語の背景になる知識・経験の不足
- 社会的場面での使用不足
- 言語意識・アイデンティティー多様化
- 言語力と知的発達の乖離

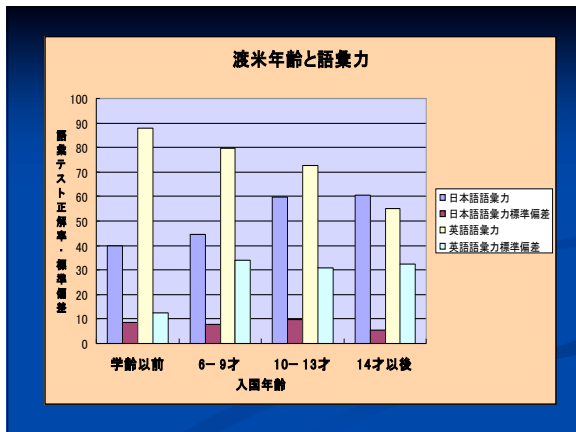
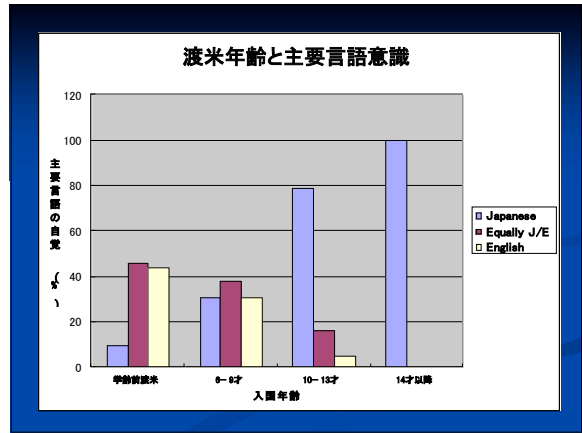
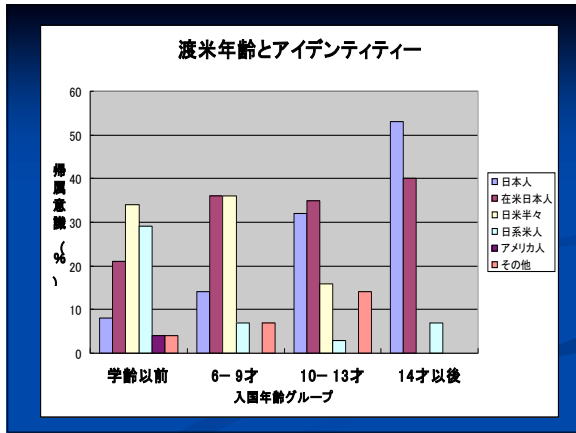
補習校生徒のプロフィール

北米東部地区主要8補習校高校生122人の調査から(2004)

- 平均在米年数:10.1年(最長:17年 最短:2ヶ月)
- 出生国:日本(62人) アメリカ(38人)
- 国籍:日本(63人) 日米両国(29人) アメリカ(20人)
- 大学進学予定:日本(51人) アメリカ(54人) 未定(31人)
- 日本語の目標レベル:
母語話者(56人) 留学生(28人) 新聞が読める(22人)
- アメリカ社会に適應しているか?
Yes(41人-28人-32人-6人-5人-3人) No
- 日本社会に入った場合に適應できるか?
Yes(10人-24人-40人-19人-15人-8人) No
- 現地校の上に補習校に通うことはプラスか?
大きなプラス(33人) かなりプラス(24人) プラス(42人)
- 日本語の学習は他教科に役立つか
大きなプラス(20人) かなりプラス(30人) プラス(50人)
- 子供に日本語を勉強させるか
必ずさせる(70人) せひさせる(30人) たぶんさせる(12人)

渡米年齢別進路希望





- ### 長期在米生・補習校卒業時の総合的運用力
- OPIを補習校高校生に適用（試行中 高校生N=7人）
 上級の中一上に入る生徒が多い
 文型・文法の問題は少ない
 継続して話すことは出来るが論旨が散漫になりがち
 （若年継承語学習者の評価ツールとして適切か？）
 （コーパス作成の必要）
 - APテストを受験した補習校生には「5」が圧倒的（2007年）
 Mカーブの右の山（JHと受験者数を分けあう）
 弱点：聞き取りの弱さ・考えすぎ・準備不足
 - 卒業生の自己評価（社会人になって実感する弱点）
 漢字の読み書き・敬語・社会的な語彙

- ### 長期在米学習者の傾向
- 特質**
 日米両文化・両言語の基礎体験がある
 現地校・英語を通して得た知識の転用が可能
 母語社会（家庭・コミュニティ）の支援が得やすい
 - 配慮する点**
 日常会話から社会で機能する言語への発展
 母語の背景にある言語社会体験の意識的な導入
 現地校での教育を視野に入れる
 年齢相応の認知力に対応する

- ### 補習校における継承語カリキュラムの目標 （国語教育と外国語教育の折衷編成）
- 国内生徒向けの国語教育の発想から離れ、在外学習者の母語支援に必要な多角的な教授法
 - 言語の背景にある社会的・文化的な理解を促す総合的なカリキュラム
 - 言語力よりも高いはずの認知面の発達を視野に入れる
 - 家庭での言語使用を背景に目標値を高く設定

補習校における継承語教育の枠組

- 国語教科書の多面的な利用
(指導書を越えた多様な解釈と指導メソッド)
- 文科省指導要領とACTFLスタンダードに対応する
- 多様な分野の統合型学習
(文学+理科+社会+歴史+時事問題)
- 知的発達を視野に入れる
(即物的な学習→抽象的な概念へ)
- バイリンガルの利点を生かす
(英語による背景の知識の導入)
- 生徒の多様性・言語力と年齢の不一致
(マルチエイジ・小クラス)
- 家庭の支援を利用する

13

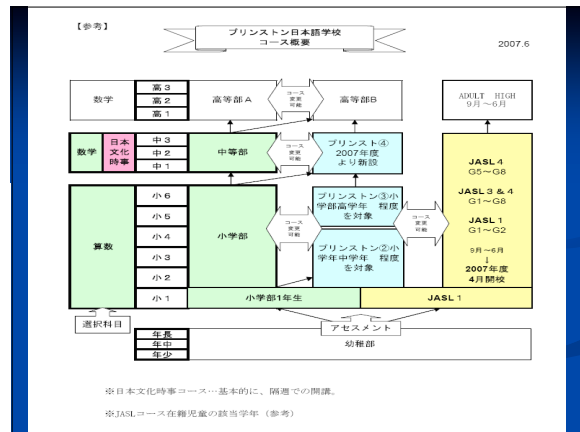
継承語学習者とACTFL(米外国語教育学会) Standards

- Communication (機能する4技能)
 - Interpersonal (対人的 - 家庭でかなり体得)
 - Interpretive (読解・聴解 - 分析能力の涵養)
 - Presentational (発表形式 - 内容にふさわしい形式)
- Comparison (母語・母文化と現地語・現地文化の比較)
- Connection (二言語で得た多様な分野の結合)
- Community (家庭・補習校コミュニティー)
- Culture (文化の実体に触れている→コンセプト理解)
 - Product(産物) Procedure(慣行) → Perception(概念)

14

プリンストン日本語学校

- 生徒数: 2008年4月現在300名弱(教員30名)
- NJ中央部の大学街(競合する教育施設はない)
- 大企業の集中がない・独立型の邦人が多い
- 目的別3コースの併設
 1. 国語コース(文科省準拠・1980年の開校から)
 2. JFLコース(独自カリキュラム・1980年の開校から)
 3. 継承語(JHL)コース(独自カリキュラム・1995年から)
 - 高等部永住生クラス(1995年から現在)
 - 小学部パイロットクラス(2002-2004年)
 - 中等部選択クラス(2003年から現在)
 - 永住生小・中一貫コース(2004年から現在)



永住生コース参加の条件とクラス分け

- コース参加・移籍: 本人・保護者・教師の話し合い
- 条件: 家庭での母語支援が可能
平仮名と片仮名の導入が済んでいる
(小学校2年生から)
- この基準に満たない生徒はJFLコースで引き受ける
- 文科省・JFLコースからの移籍・転校生・未就学児童の混在
- 小学生クラス
(年齢と読み書き能力の不一致を克服することを目指す)
- 小学生クラス内の小グループ
 1. 言葉の力によるグループ分け(漢字・読解・音読)
 2. 年齢によるグループ分け(総合プロジェクト)

クラス編成と目標

(年齢に応じた知的発達に合わせて)

- 小学部 (2008年4月現在13人)
 - 生活の中の言語の確立→社会的拡がりのある言語
 - (1) 読解・音読・発表 (2) 漢字・ことば (3) プロジェクト
- 中等部 (7人)
 - 社会的・抽象的な言語への拡大・意見の表明
 - (1) 読解・音読・発表 (2) 漢字・言葉 (3) 文化・時事問題
- 高等部 (6人)
 - 社会人としての言語使用・Critical Thinkingの涵養
 - (1) 近現代文学 (2) 時事問題 (3) 日本史(文科省組と合同)

授業活動(小学部クラス)

- 漢字(1コマ=45分)
A-B-C-D-Eレベル(小1-6年+AP漢字)
毎週4-5文字(コンテキスト・ベース 音訓導入)
- 読解・音読・発表(2コマ)(習熟度別・2グループ)
国語教科書「みんなと学ぶ」・一般図書
音読:日本語のリズムや流れ・擬声語・擬態語
音読集・詩・歌
発表:自分と聞き手に分かる内容
- 総合プロジェクト(1コマ)(年齢別・2グループ)
他教科との連携・グループと個人の調べ学習
年齢相応の認知力と個性の発揮
発表:社会的運用力の涵養(ミニドラマの発表)
(例:きゅうきゅうはこの中・茶の科学と茶会・磁石)

小学校高学年・総合科授業計画

Mar. 2/2008

プリンス頓日本語学校

Feb. 17/2008

年	月	日	日	行事	備考	備考
4	4					
	6	1		入学式	1年の始まり 自分を知ってもらおう(ポスター作成)	保護者参加
	12	2		選科授業開始	完成したポスターを使って、自己紹介	
	20	3			春を探そう散歩・俳句をつくる(挿絵つき)	
	27	4			謎い物(針と糸を使う練習)	
2	5	4	5		母の日手紙をおくろう(針と糸で刺繍)	八十八夜
	11	6		授業参観(参観)	八十八夜にちなんで:お茶の学習とお茶会	母の日
0	18	7		授業参観(参観)	理科 磁石	
	25	8			理科 方位磁針を使って地図を書こう	Memorial Day
0	6	1	9		夏を探そう散歩・俳句を作る(押し花)	
	8	10		漢字検定試験	父の日手紙をおくろう(押し花を使って)	
8	15	11			社会 世界を知ろう	父の日
	22	12			社会 日本を知ろう(夏休みに日本へ行くために)	

日本文化時事クラス

(中学生合同選択クラス=45分 隔週)

- 中国首相日本訪問
- バージニア工科大学乱射事件
- 日米祝日比較
- 憲法改正問題
- 和楽器・三味線
- 日系人収容所
- 大リーグ日本人選手
- 赤福偽造問題
- 捕鯨問題
- 日本の宗教

高等部JHLクラスの実践例

- 文学+現代史+科学 (2週間 x 4コマ)
「ヒロシマ・ナガサキから核問題へ」
 - 導入:長崎の歴史(写真・ビデオ・歴史書)
 - 短編通読「夏の花」「ギヤマン・ビードロ」
 - 雑誌「TIME」原爆投下60年特集(2005年8月)
英文記事をグループに別けて速読
 - 被爆者の「その瞬間」と現在
 - 被爆の科学的検証(熱エネルギー・生存率)
 - エノラ・ゲイ乗員の証言(No regret)
 - 核不拡散条約の現状
 - グループ別にまとめを日本語で発表(語彙リスト)
 - ディスカッション(クラス)→作文(自宅)

家庭との連携

- 保護者の自覚と協力
母語リソースとしての親(継承語教育に不可欠)
- 宿題:過重な負担を与えない量
基礎力の積み上げ + 個に応じた融通性
- 毎週の宿題(小学校高学年クラスの例)
 - 音読(復習:前の週にクラスで扱った読解・音読教材)
 - 音読教材の視写
 - 漢字の復習(毎週4-5文字・用法調べ)
 - 教師と生徒との短い交換日記(日常の話題を週に1日)、
(5)読解教材の内容を自分の言葉で書く
 - 言葉のクリニック(間違いさがしプリント)
 - 総合プロジェクトのための調べ学習

評価の基準

- コメント形式の評価(教師→生徒・保護者)
- 本人の評価・Peer評価
- 小学部から中等部への進級基準
社会的機能のある言語が入門レベルに到達(4技能)
 - 小学校高学年の読み教材が理解できる
それについての意見を学習言語で伝えられる
 - 伝えたい内容を原稿用紙1枚ほどに書き言葉で纏める
 - 小学校3年生程度以上の漢字の読み書き能力
- 中等部から高等部への進級基準
社会的機能のある言語の使用・論理的な表現

教師の確保と養成

- 教師の8割は保護者(学校全体)
教員免許保持者は少ない・就労ビザの問題
土地柄から公募による人材は集まらない
海外で子育てをした親の経験・視点(親が在外子女)
- あらゆる背景の候補者の利点を使う
それぞれの個性と背景を授業に生かす融通性
(理科系・ビジネス・特殊支援教育・モンテソーリ・漢文専攻)
- 教材開発の重視
1年間の有給準備・コース開始後3年間の教材開発費
自前の勉強会
校内研修(有給)・自主研修(無給) → 育つ教師
他地域の教師との交流・学会への参加

継承語コース設置の結果

生徒数の増加

- 生徒全体の心理面の安定 → 脱落する生徒の減少
- 従来の補習校生徒以外への学習機会の提供

文科省教程にAlternativeの発想を提供

今後の課題

- 言語力・認知力の発達に応じた教材編成
低・高学年の連続性
トピック・概念の連続性
語彙・文法の一貫性 → 独自テキストの発行
- 進級基準・評価ツールの開発
(達成度測定・自己評価・客観評価)
- 保護者啓蒙の必要
(生徒に最適なコース選択をすすめるために・・・)

26

参考文献

- American Council on the Teaching of Foreign Languages National Standards in Foreign Language Education Project (2006). *Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century*. 3rd Edition. Lawrence: Lawrence KS: Allen Press Inc.
- College Board (2007). *AP Japanese Language and Culture Course Description*.
- Gilson, E., Adair-Hanek, Koda, K., Sandrock, S., & Swender, E. (2003). *ACTFL Integrated Performance Assessment*. American Council on the Teaching of Foreign Language.
- Hadley, O. (1993). *Teaching Language in Context*. 2nd Ed. Ch.8. Boston: Heinle & Heinle
- Kondo-Brown, K. (2006). *Heritage Language Development: Focus on East Asian Immigrants*. Amsterdam, NLD: John Benjamins Publishing Company.
- Smith, L., Dockrell, J. & Tomlinson, P. (Ed.) (1997). *Piaget, Vygotsky and beyond—A future issues for developmental psychology and education*. New York: Routledge.
- 片岡裕子・桂山愛子・柴田節枝(2005)。「アメリカにおける補習校の児童・生徒の日本語力及び英語力の習得状況」国際教育評論2。
- カルダー・渾子(1998)。「在米の長い補習校高校生のための教材開発と授業プラン」東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要。第9集
- —— (2006)。「北海道地区補習校高校生調査報告書」調査参加校配布資料
- 栗原祐司・森真佐子(2006)。「海外で育つ子どもの心理と教育—異文化適応と発達支援」東京 金子書房
- タグラス昌子(2006)。「継承日本語学校カリキュラムデザインの理論的枠組みの構築に向けて」JICJLE NY 発表資料
- タグラス昌子・片岡裕子・岸本俊子(2003)。「継承語校と日本語補習校における学習者の言語背景調査」国際教育評論1。
- 知念徳典(2006)。「日系二世のアイデンティティー形成と日本語能力向上における補習授業校の役割」Pom-46(JLE, NY)
- 中島和子(2001)。「バイリンガル教育の方法 12才までに親と教師ができること(増補改訂版)」東京アルク
- 森美子(2005)。「二言語のはざままで育つ補習校の子どもたち」藤田修他(編)「言語教育の新展開—牧野成一教授古希記念論文集」ひつじ書房 425-446
- モイヤー龍樹(2005)。「多様化する子どもたちへの対応—多様化するニーズ—日本人学校・補習授業校への新しい課題」月刊海外子女教育2005年3月号